




## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2952 号	氏名	高口 緑 (田中 緑)
審査担当者	主 査	島 村 拓 司	
	副主査	牛 嶋 公 生	
	副主査	長 藤 宏 司	
主論文題目： Reduction in nephrotoxicities using short hydration for chemotherapy containing cisplatin: a consecutive analysis of 467 patients with thoracic malignancies (シスプラチン投与時の short hydration 法の意義：胸部悪性腫瘍患者 467 例での検討)			

### 審査結果の要旨 (意見)

現在シスプラチンは様々な癌腫において、薬物療法の Key drug として用いられている。シスプラチンの主な副作用には悪心嘔吐などの消化器症状と、腎障害が挙げられ、腎障害に対しては大量の輸液にて対応しているのが現状である。本研究で著者らは通常の間隔にわたる輸液療法と短期間に大量の輸液を行う Short hydration 法とを後方視的に解析し、各種腎機能のパラメーター、治療継続期間、無増悪生存期間、累積生存期間などを比較し、Short hydration 法が従来の輸液法に比べ腎障害が軽微であること、治療期間や予後への影響がないことなどを証明した。今後本研究の成果により、Short hydration 法が実臨床でさらに広く用いられれば患者さんの負担軽減に繋がるものと期待される。

### 論文要旨

シスプラチン(CDDP)の投与方法として short hydration(SH)法と従来の輸液法を 467 人という十分な症例数で比較した研究報告はない。今回 2009 年から 2013 年の間に、アプレピタント、パロノセトロン、デキサメタゾンによる制吐療法を用いて CDDP 投与を受けた、70 歳未満の胸部悪性腫瘍患者 467 人を対象に腎毒性とそれに関わる背景因子について検討した。SH 法/従来法で、人数：111/356 人、年齢中央値：63/61 歳、CDDP 減量：6.3/12.9%、腎毒性中止：0.9/2.2%、治療終了後 Grade1 以上の Cr 上昇：14.4/33.1%、治療終了後の eGFR 中央値：73.7/65.3 mL/min/1.73m<sup>2</sup> であった。SH 法の平均在院日数は 9.4 日で従来法 13.8 日に比べ有意に短かった。治療後の Grade1 以上の Cr 上昇に関わる因子として性別、年齢、PS、放射線治療併用の有無、Mg 補充の有無、治療前 Cr 上昇 G1 以上、投与方法を多変量解析したところ、SH 法で有意に Cr 上昇が少なかった(リスク比 0.20, p=0.006)。Short hydration 法は腎毒性の出現頻度を低下させる。